

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷三第

論說

國防稅ノ本質

でがめつぎ・ひゆーむノ經濟學說(四)

資本ノ眞概念ノ發展(三)

戰後ノ人口増加政策(二)

支那近代ノ戸口ニ就テ(三三卷)

在外正貨ト兌換券ト關係ヲ論ズ

雜錄

服部氏國際經濟論ニ對スル向井氏ノ批評

瀧本誠一氏ノ草茅ニ解答ニ就イテ

福田博士ニ答フ

戰時利得稅ノ諸學說及實例

英吉利ノ新稅

米國ニ於ケル船舶買收法案ニ就テ

經濟雜誌第五

統計書ノ概說

らぐれー「ミール」學說ノ研究(三)

『通俗經濟文庫』ノ刊行

『經濟大辭書』ノ完成

法學博士 神戸 正雄

法學博士 福田 德三

法學博士 河上 肇

文學博士 米田庄太郎

文學博士 内藤虎次郎

法學博士 小川郷太郎

法學博士 河上 肇

法學博士 鈴木券太郎

法學博士 本庄榮治郎

法學博士 神戸 正雄

法學博士 河田 嗣郎

法學博士 岸本熊太郎

法學博士 田島 錦治

法學博士 財部 靜治

商學士 大塚金之助

法學博士 福田 德三

法學博士 神戸 正雄

(載 轉 禁)

經濟雜話第五

田島錦治

(十二)家婢ノ拂底—(十三)商人ノ懸直ニ就テノ古キ一考證—
(十四)唐人樂唐卿ノ詩ト獨人ぶるの—、ひるでぶらんごノ經
濟說

(十二)家婢ノ拂底

近年我國各都會ノ中流以上ノ家庭ニ於テ家婢拂底ノ聲ヲ聞クコト漸ク多シ而シテ此聲ハ歐洲ニ於テ更ニ大ニシテ米國ニ於テ最モ甚シキモノノ如シ此家婢供給ノ減少ニ伴ナヒテ其給金ノ騰貴

セルコト亦甚タシク而シテ其割合ハ他ノ何レノ職業ノ給金ヨリモ大ナリ即チ日本帝國第三十四統計年鑑(第百二十三表)ニ依ルニ各種賃金ノ指數ハ明治三十三年(西曆千九百年)ヲ百トスレハ其總平均ハ明治四十年(一九〇七年)ニ於テ百三十四、一ニ上リ大正二年(一九一三年)ニ於テ百六十、八ニ上リタレドモ家婢ノ賃金ハ前記各年ニ於テ百ヨリ百五十五、八ニ上リ次ニ百九十一、七ニ上リタリ今女子各種職業ノ賃金指數ヲ對照スルニ

	一九〇〇年	一九〇七年	一九一三年
農作半雇女	100.0	123.4	182.1
農作日雇女	100.0	125.8	151.6
養蠶職女	100.0	121.1	147.4
蠶絲練女	100.0	125.0	154.0
機織女	100.0	110.0	130.0
下女	100.0	125.8	171.4

此表ニ依レハ家婢給金増加率カ他ノ傭賃金ニ比シテ最モ大ナルヲ知ルヘシ而シテ今更ニ同年鑑(第九十九表)ニ依ルニ全國工場ニ使役セラルル男女職工一人一日ノ賃金ハ左ノ如シ

	一九〇〇年	一九〇七年	一九一三年
(明治三十三年)		(明治四十年)	(大正二年)
十四歳以上(男)	元	四角	六角
十四歳以上(女)	九角	四角	六角
十四歳未満(男)	二角	二角	三角
十四歳未満(女)	二角	二角	三角

此表ニ依リテ更ニ指數ヲ求ムルトキハ左ノ如シ

	一九〇〇年	一九〇七年	一九一三年
十四歳以上(男)	100.0	121.9	147.6
十四歳以上(女)	100.0	111.0	147.6
十四歳未満(男)	100.0	121.7	150.0
十四歳未満(女)	100.0	121.7	150.0

此表ニ依ルトキハ全國工場ニ使役セラルル男女職工ノ賃金ハ一九〇〇年乃至一九一三年ノ十三年間ニ於テ其十四歳以上ノ者ニ在リテハ四割三分ヲ増加セルヲ知ル之ヲ同年期間ニ於ケル家婢ノ給金ノ九割ヲ増加セルニ比スレハ其増加率ハ二分ノ一ニモ及ハサルナリ然レドモ家婢ノ絶對的給金ノ額ハ之ヲ工女ニ比スレハ今日モ尙低キモノノ如シ今我國最大工業地ノ一ナル大阪市ニ就テ工女ト下女トノ給金ヲ比較スルニ左ノ如シ(第十三回大阪市統計書ニ依ル)

工女の類別	最多	最少	平均
織維及染織工業	八〇 <small>錢</small>	八 <small>錢</small>	二六 <small>錢</small>
機械工業	五〇	七	二五
化學工業	六〇	一三	二六
飲食工業	五〇	一〇	二〇
雜工業	七〇	六	二二
種工業	四〇	二五	元

總平均 六〇 六 七〇

前表ハ大正二年ニ於ケル各種工女ノ平均賃金ヲ示シタルモノナルカ之ニ依レハ大阪市ノ工女ノ賃銀ニ最モ多キハ一日ニ八十錢最モ少ナキハ六錢ニシテ平均二十七錢ナリ(前掲大阪市統計書第三百六十六表ニ依ル)

然ルニ同市大正二年ニ於ケル下女ノ給金ハ月給賄付ニテ最高五圓二十九錢最低三圓普通ハ四圓ナリ(前掲「阪市統計書」第二百六十八表ニ依ル)固ヨリ家婢ハ其貨幣的給料ノ外ニ食ト住トノ實物的給料ヲ受クルヲ以テ通常單ニ貨幣的ノモノヨリ成レル工女ノ給料ト比較スルハ頗ル困難ナリト雖前掲ノ統計ニ依リテ我國ニ於ケル下婢ノ給金カ工女ニ比シテ稍下位ニ在ル事ハ之ヲ肯定スルヲ得ヘシト信ク然ラハ現今我國ニ於ケル家

婢ノ拂底及ヒ其給料ノ騰貴ノ著ルシキ所以ハ蓋シ工業ノ進歩ニ伴ナヒ工女ノ需要ヲ増加シ隨テ其賃金カ騰貴シタルモノ是レ其最大原因ナリト謂フヲ得ヘキニ似タリ其證據ニハ下女ノ拂底ハ大阪市ノ如キ大工業都會ニ最モ甚シクシテ隨テ下女給金騰貴ノ割合ハ最モ大ナルヲ見ル即チ左表ノ如シ(前記大阪市統計書第二百六十八表ニ依ル)

大阪市下女月給(附付)

年	最高	最低	普通
明治三十三年	11.00	1.00	1.500
明治四十年	14.00	1.000	3.500
大正二年	51.00	11.000	20.000
大正三年	51.00	10.000	20.000

此表ニ依ルトキハ一九〇〇年乃至一九一三年ノ十三年間ニ於テ大阪市ニ於ケル下女ノ普通ノ給金ハ百ヨリ二百六十六、六ニ増加シタルモノニシテ前掲全國ノ下女給金指數カ同期間ニ於テ百ヨリ百九十一、七ニ増加シタルモノト比較セハ以テ余ノ斷定ノ大ナル謬ナキヲ證スルニ足ラ然レトモ歐米特ニ米國ニ於ケル家婢拂底ノ原因

ハ大ニ我國ト事情ヲ異ニスルモノノ如シ請フた
 うしつく氏ノ語ヲ假リテ之ヲ證セン氏ハ曰ク米
 國ニ於テハ工場又ハ店舗ニテ働ク所ノ婦人又ハ
 少女ハ下婢ヨリハ安キ給金ヲ受ク縱令貨幣ニテ
 受ケ取ル給料ノ額ハ兩者往々略ボ同一ナレトモ
 家婢ハ此上ニ食ト住トヲ受クルヲ以テ其全體ノ
 給料ハ遙カニ大ナリ而シテ其重ナル理由ハ米國
 ノ如キ民主的社會(a democratic community)ニ
 於テハ婢僕ノ勤務ハ卑屈ニシテ嫌惡スヘキ性質
 ノモノナリ蓋シ店舗ニ働ク少女ハ家婢ヨリハ長
 キ時間劇シク働クコト往々コレ有レトモ其仕事
 ハ彼ノ如ク從人的ナラズシテ其時間ハ嚴密ニ定
 マリ一日ノ仕事カ畢レハ其身ハ全然自己ノ自由
 ナリ歐洲諸國ニ於テハ自由ノ精神及ヒ平等ノ念
 カ米國ニ於ケルカ如ク大ナラサルカ故ニ前述ノ
 如キ理由ハ尙ホ薄弱ナリ故ニ彼ニ於ケル家婢ノ
 給料ハ我ニ於ケル如ク高カラズ米國ノ富裕階級
 ノ家庭主人ハ徒ラニ家婢ノ拂底ト其給料ノ高キ
 トニ就テ苦情ヲ唱ヘテ是レハ民主的精神ノ當然
 ノ結果ナルノ點ニ想ヒ到ラズト (Fausig Prin-

iples of Economics II. 1911, page 125)

(十三)商人ノ懸直ニ就テノ古キ一考證

我國古風ノ商店ハ今尙ホ「現金懸直ナシ」ト染出
 セル幕ヲ前ニ掲クルアリ又ハ「懸ケ賣時貸一切
 不仕候」トノ紙「ビラ」ヲ店ノ天井ニ下クルアリ
 支那ノ都會ニハ不二價ノ看板ヲ掲クル商店多ク
 歐洲ニテモ往々「Nur Ein Preis」トカ「Prix fixe」
 「Fixed Prices! No Abatement!」ナドノ語ヲ店
 頭ニ掲クルモノヲ見ルヘシ抑モ商人カ懸直ヲ爲
 スノ惡風ハ古今ヲ通シ東西ニ亘リテ行ハレタル
 モノノ如ク而シテ其支那ノ古典ニ見ユルハ余ノ
 識ル所ニテハ荀子ハ荀子ノ儒效篇ニ秦ノ昭王カ孫卿子
 卽チ荀子ニ儒者ハ國ニ無益 モノナリヤトノ問
 ニ答フル辭ノ中ニ「仲尼將_レ爲_ニ司寇、沈猶氏不_レ
 敢朝飲_ニ其羊、公慎氏出_ニ其妻、慎潰氏踰_ニ境而徙、
 魯之粥_ニ牛馬者不_レ豫買_ニ」トアリ是レ卽チ荀子
 カ儒者ノ效益ヲ説キタル一節ニシテ孔子カ魯國
 ニ仕ヘテ司寇ノ官ニ就キ宰相ノ事ヲ攝行セント
 スルヤ從來羊ニ朝早ク水ヲ飲マシメ乳量ヲ多ク
 シテ市人ニ詐リタル沈猶氏ハ懼レテ此不正行爲

ヲ止メ公慎氏ハ其淫亂ナル妻ヲ去リ從來法度ヲ
 踰ヘテ奢侈ヲ行ナヘル慎潰氏ハ他國ニ逃レ移リ
 而シテ魯國ニ於テ牛馬ヲ販賣セル者ハ豫買セズ
 即チ懸直ヲ爲サザリシトナリ買ハ價ト同シク豫
 買ハ高價ナリトイフ説ト豫ハ誑ノゴトシトイフ
 説ノ両説アレドモ畢竟懸直ノ事ナリ孔子家語ノ
 相魯篇ニ「孔子爲政、三月、則鬻牛馬者不
 儲買」トアリ蓋シ同事ヲ謂フナリ儲ハ奢ト古聲
 相近クシテ説文ニ奢ハ張ナリトアリ然レハ儲買
 ハ誇張セル價ニシテ即チ懸直アリ又司馬遷ノ史
 記循吏傳ニ「子産爲相、市不豫買」トアリ子
 産ハ鄭國ノ賢臣ニシテ孔子ヨリ前ノ人即チ孔子
 カ三十歳ノ時歿セル人ナリ此等ノ記事ニ徵スレ
 ハ春秋時代ノ支那ノ商人間ニ懸直ノ惡風カ一般
 ニ行ハシタルハ明カナリ故ニ齊ノ管仲カ著ハシ
 タリト稱セラルル管子ノ乘馬篇ニハ誠買ノ説ア
 リ曰ク「非誠買不得食子買、非誠工不
 得食子工」云々ト所謂誠買ハ正直ナル商人
 タイヒ懸直ヲ爲スカ如キ者ニ非サルハ明カナリ
 又同書國蓄篇ニ「歲有凶穰、故殺有貴賤、令有

緩急、故物有輕重、然而、人君不能治、故使
 買游市、乘民之不給、百倍其本」トアリ所謂
 蓄買ハ買占ヲ爲ス商人ナリ茲商カ米穀ノ買占ヲ
 行ナヒ其價ヲ高クシテ不義ノ利ヲ占ムルノ弊ヲ
 痛言セルナリ是亦豫買ノ一例ナリト謂フ可キ
 歟

漢ノ桓寬ノ著ハシタル鹽鐵論ノ力耕篇ニ曰ク
 「古者商通物而不豫、工致牢而不僞」トアリ
 又同書禁耕篇ニ曰ク「國富而教之以禮、則行
 道有讓、而工商不相豫」トアリ是ニ由テ之ヲ
 觀レハ漢ノ時代ニ於テモ懸直ノ惡風買占ノ弊害
 ノ盛ナリシヲ知ルナリ序デ乍ラ我國徳川時代ノ
 商人間ニ懸直ノ行ハシタル證據トシテ文化二年
 頃ノ川柳狂句ノ一二ヲ擧クヘシ

直ザきにまけたで女房はちつと買ひ
 はしむおりきると二階でひなをまけ

(十四) 唐人葉唐卿ノ詩ト獨人 Bruno Hildebrand

ノ經濟說

近世獨逸ノ歴史派經濟學ノ創立者トシテ Karl
 Knies, Wilhelm Roscher ノ二氏ト并ヒ稱セラル

ル所ノ Bruno Hildbrand (一八一二年乃至七八年)ハ始メテ經濟ノ三時期ヲ區分シ第一實物經濟 (Naturalwirtschaft) 第二貨幣經濟 (Geldwirtschaft) 第三信用經濟 (Kreditwirtschaft) ト爲シ而シテ此區分ハ經濟學者ノ一般ニ廣ク採用スル所ナリ (Br. Hildbrand, Jahrbücher für Nationalökonomie, Jahrg. 1864) 然ルニ余曾テ唐詩ヲ讀ムニ葉唐卿ノ漁父ノ詩アリ曰ク

網裡無魚無酒錢。酒家門外口流涎。幾回欲解蓑衣一當上。又恐明朝是雨天。

僅々二十八字ニシテひるでぶらんどノ謂ユル三種ノ經濟ヲ包含スルノミナラス而カモ其眞理ヲ有韻ノ畫ヲ以テ面白ク趣味深ク描キ出セルハ實ニ一誦三嘆ヲ值ス謂ユル網裡無魚ハ是レ實物經濟即チ魚ヲ以テ酒ニ換ユル交易ノ行ハレ難キヌイヒ謂ユル無酒錢ハ是レ漁父ノ囊中錢無クシテ貨幣經濟即チ錢ヲ以テ酒ヲ買フ能ハサルヲイヒ而シテ謂ユル欲解蓑衣一當上ハ是レ信用經濟ノ行使即チ漁父カ其着ル所ノ蓑衣ヲ脱キテ抵當即チ質ト爲サント欲スルヲイフナリ